

**令和7年度 徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター
外部評価委員会 評価結果一覧表**

番号	調査研究名	(1)達成度	(2)先駆性	(3)適正性	(4)実用性	(5)発展性	合計
1	出羽島における地域とつながる活動とシビックプライドの醸成に係る調査研究	19	18	20	18	19	94
2	にし阿波高校生による『世界遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」ブランド認証品』の活用可能性調査	22	15	20	19	20	96
3	学校と地域が連携した持続可能で新たな部活動のあり方に関する調査研究～当事者の声を教育政策へ～	20	17	17	19	21	94
4	食で支える未来の防災：次世代と築く備蓄のまち	20	20	19	21	23	103
5	大学と子ども食堂等の連携による地産地消の食育プログラムの開発	21	17	21	22	20	101
6	子どもの健やかな育ちを支える環境づくりを担う人材の養成に関する研究—こども家庭ソーシャルワーカーの養成を通して—	17	23	19	20	22	101

※1 評価項目の視点について

- (1) 達成度
 - ① 研究目的がどの程度達成されているか。
 - ② 効果が発揮されているか。または効果の発揮が期待できるか。
- (2) 先駆性
 - ① 新しい視点、発想による提案等が含まれているか。
 - ② 創造性、独自性に富んだものか。
- (3) 適正性
 - ① 手段やアプローチ方法が妥当か。
 - ② 調査や検証が十分行われた内容となっているか。
- (4) 実用性
 - ① 地域における実用性、実現可能性が高いものか。
- (5) 発展性
 - ① 新しい知見や価値観が得られるものか。
 - ② また、波及効果があるものか。

※2 評価基準と評価結果の公表について

- (1)～(5)の視点ごとに各委員(5名)が5段階評価「5非常に優れている、4優れている、3普通、2あまり評価できない、1評価できない」で採点を行い、(1)～(5)ごとの委員全員の評価結果の小計、全評価項目の合計(最大評点125点)、併せて、各委員の所見について代表的なものを公表する。

令和7年度徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター 外部評価委員 所見一覧

調査研究名	研究主体	委 員 所 見
出羽島における地域とつながる活動とシビックプライドの醸成に係る調査研究	南部総合県民局	・多種多様な方が地域活動を通じて育む地域への思いが、今後、出羽島の具体的な地域活性化(体験プログラム等)にどう繋がっていくか期待しています。また、本研究の結果が、他地域にも応用可能なモデルとなるような事業へと発展することを願います。 (補足)調査研究報告書について、固有名詞(例:「てばじま」、「あひるぶね」など)にフリガナがあれば、より幅広い読者に分かりやすくなると感じました。 ・シビックプライドの醸成には持続的な取り組みが必要だと思います。 今回の体験プログラムを通じて見えてきた課題を改善し、今後の持続的な取り組みに繋げてもらいたいと思います。 ・子どもさんに体験してもらえよう、続けていただきたいです。 ・シビックプライドの醸成により、地域の振興と関係人口の増加へと繋げていきたいとの目標の設定は評価できる。家鴨船の調査及び製作へ要した時間と労力が完成した船の今後の活用等に係ってくるが、その点が少々懸念される。出羽島全体を俯瞰することから、広く「みなみ阿波」全域への地域活性化と発展することを期待したい。 ・ユニークな調査研究で興味深く拝見しました。地元住民をはじめ大学生やデュアルスクールで帰省中の子供らも参加してさまざまな試みを実施した成果を将来の体験プログラム等に繋げてほしいと思います。また、家鴨船は試作した現物だけでなく、製作工程なども一緒に保存・展示していただきたいです。第6章に「出羽島は社会の縮図のようなもの」と書かれていますが、他の消滅可能性自治体のヒントにもなるような取り組みに発展させていただきたいと感じました。
にし阿波高校生による『世界遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」ブランド認証品』の活用可能性調査	西部総合県民局	・地域を担う高校生が、地元産品を使用したメニューや商品開発に取り組み、その成果が商品化され、実用性に繋がっている点を評価します。 高校生のアイデアを活かしつつ、若い世代だけでなく、あらゆる世代が協力し、地域全体を巻き込んだ持続可能な活動に発展していくことを期待しています。 ・研究目的であるブランド認証品を活用したレシピの商品化ができたことは参加した高校生にとってとても良い経験になったと思います。 ・古いものの評価をベースにしつつ、新しい取り組みをしており、評価できます。 ・これまで地域高校生による「にし阿波」の農業や食文化についての調査や報告書の完成という成果があった。今回は、地域のブランド認証品を用いた商品化への挑戦である。脇町高校と池田高校の生徒による食材の選定、加工、試作商品化までの努力を称えたいと考える。「にし阿波傾斜地農耕システム」を守り、伝えていくために若い世代の将来に向けての活動に期待が大きい ・若い世代の人たちが地域の伝統食材を用いて新たなメニューを生み出す取り組みは、最近、多く見られます。この調査研究の最大の強みは、高校生が傾斜地農法の歴史を調べ、現地調査を行い、生産者の思いを聞き取りしたことにあると思います。完成したレシピ概要には「アイデアや名称に込めた想いやエピソード」が書かれていますが、そうしたある種「ドラマ」をいかに消費者に伝えていくかを大事にしてほしいです。聞き取り調査はそのまま生産者の「生活史」でしょう。ぜひ、残していただきたいです。
学校と地域が連携した持続可能で新たな部活動のあり方に関する調査研究 ～当事者の声を教育政策へ～	徳島大学	・学校と地域が協力して行う「新たな部活動のあり方」を提言する、今後の課題解決につながる研究だと感じました。 ・今後、各学校等で部活動のあり方を検討する際には、今回の調査結果を活用した施策が実施されるよう期待します。 ・当然こうなる、という答えが出ている印象です。外部が関与している状況は、「強い部だから」「伝統があるから」など、単純に外部関与だけを要因としてよいのか、疑問です。部活が地域クラブに先行して移行した地域と旧来の地域との差異を、今後調査してください。 ・部活動のあり方について、興味深い視点から調査・研究がされている点を評価したい。文科系と運動系の比較からの結果や部活動が心身へどのような影響を及ぼしたかなど、数値化できて分かり易い。今回は過去を振り返っての調査であったが、今後は現役の中・高生への調査を通し、部活動について学校と地域の連携、指導者の選択などにも言及されたい。 ・大学生による回顧的調査で、当事者視点と俯瞰的視点が合わさったデータは部活動の在り方を模索する基礎資料として有効な調査結果だと思います。2点お願いしたいです。1点は「終わりに」にも書かれていますが、部活動に否定的経験を持つ人や途中退部者の声も聞き取りしてほしいこと。もう1点は「学校と地域の連携」をどのようにして実現していくかのヒントが得られるような事例調査のようなものへ研究を深めていただきたいことです。
食で支える未来の防災：次世代と築く備蓄のまち	徳島大学	・高齢者施設における非常食備蓄は、防災における新しい視点と感じました。 本研究の成果が、高齢者施設の防災意識向上や、施設に入っていない高齢者世帯を含む多様な層への防災対策へ繋がるよう、調査結果の幅広い活用を期待します。 ・長期の避難生活では非常食の栄養バランスや食べやすさなどの質的側面が重要になると思います。 避難所等における非常食の質的側面を強化するための資料となるよう引き続き取り組んでいただけるよう期待します。 ・いい活動だと思います。 ・災害弱者に視点を当て、災害時における備蓄についての研究は非常に重要な課題であると認識する。各自治体においても、防災訓練や避難所での体験を通して様々な試みを実践しているが、非常食の備蓄についての詳細は把握できていない。災害弱者(特に高齢者)への細やかな配慮ができることは、被災者全般への食事提供対策を考える上でも肝要である。 ・報告会でも質問させていただきましたが、回答率18・4%は気になりました。比較的備蓄を行っている施設の回答が多かったと推測でき、かつ、その施設でもこの程度の備蓄なのかと、少々驚きをもって報告をお聞きました。「考察」に「広域災害の初動・孤立期に対して脆弱であることが示唆された」とありますが、それをどのように周知していくかを、今後、研究を深めていくと同時に、検討していただきたいと思います。
大学と子ども食堂等の連携による地産地消の食育プログラムの開発	鳴門教育大学	・大学生と子ども食堂の連携による地産地消のメニューや手遊び等の食育プログラム開発は、実践的で地域貢献性の高い取り組みと感じました。 子ども食堂だけでなく地域全体への普及に向けた汎用化や、持続可能な活動となるような人材確保等への取り組みを期待します。 ・「とくしま食育すごろく」は子どもが遊びながら徳島県の特産品を学ぶことができる良いものができたと思います。 活用の場を広げてもらいたいです。 ・R6年度のかかるたの発展型で、実用的かつ必要な研究と考えます。 ・食育は子どもの成長において、特に大切な課題の一つである。食べること、食を通して学ぶこと、地域の食材を知ることなど、多くの観点からの調査であると考える。「とくしま食育すごろく」は、遊びと学びを同時に体験できるもので、広くその活用の場を提供できるような情報の提供が必須である。大学生と子どもたちが協力して、調理をし、一緒に食する機会を定期的に設け、子どもたちの食への意識の変化や問題点を把握し、今後の食育活動に繋げることが大切である。 ・前年度の「食育かるた」もそうでしたが、「食育すごろく」「ランチョンマット」ともに、素晴らしいものだと思います。「今後の課題」の第一にも書かれているように、ぜひ、販売を実現させていただきたいです。調査研究のタイトルに「子ども食堂等」とあるように、子ども食堂に限ることなく食育の場に広めてほしいと感じました。
子どもの健やかな育ちを支える環境づくりを担う人材の養成に関する研究 ―子ども家庭ソーシャルワーカーの養成を通して―	徳島文理大学	・「人材確保・育成」は大きな課題であるので、本研究により、こども家庭ソーシャルワーカーの役割や必要性が認知され、地域の子育て支援の人材育成に繋がることを願います。 ・十分な募集期間がとれず参加者が少なかったことが残念ですが、アンケート調査の結果から参加者にとって学びを深められる有意義な研修であったように思いました。 ・制度自体が確かでない状況ですので、有益な試行です。 ・「こどもまんなか社会」の実現において、こども家庭ソーシャルワーカーの育成は、子どもの権利や福祉を守り、子どもと家庭のより良いあり方を支援する上で肝要である。国家資格ではなく、子ども家庭庁が認定する資格ではあるが、多様な現代社会においてその担う役割は大きく、関係機関との連携を図ることにおいて期待が大きい。こども家庭ソーシャルワーカーについて、もっと幅広い周知をし、資格認定者を増やすことが重要である。 ・新たな資格制度に対していち早く人材養成の環境づくりに乗り出していることは心強く、期待も大だと思います。「今後の展開」にも挙げられている通り、いかに受講者を増やし、有資格者をフォローアップしていくかが鍵になりそうです。関係機関とも連携し、資格の周知と受講環境の整備に、より有効な手法を模索していただきたいと思います。